



第1回 HOPE ミーティングに参加して

東北大学大学院工学研究科 博士課程後期3年
工学研究科材料システム工学専攻

川本直幸

1. はじめに

私は、現在東北大学の博士課程に在籍し、多元研の進藤大輔教授のご指導の下で透過電子顕微鏡(TEM)に関わる新技術の開発と材料科学への応用に取り組んでいます。2008年2月末、日本学術振興会主催で5人のノーベル賞受賞者を含む著名な研究者をお招きし、今後の研究者の在り方や現状について、アジア・オセアニア圏の様々な分野の大学院生で討論する第1回 HOPE ミーティングが茨城県つくば市にて開催されました。寄稿の機会を頂戴したことに際し、本ミーティングを通して私なりに体験し感じたことを中心に述べさせていただきます。

2. 第1回 HOPE ミーティング

本ミーティングでは、工学・理学・薬学・生物学などナノサイエンスやナノテクノロジーに関わる大学院生が約80人集まりました。ミーティングの期間は、6日間で、お互いが交流を深めることで、今後のアジア・オセアニア圏の研究者間での協力体制の構築を目指すと言うものです。事前に日本学術振興会がグループ分けし、私がグループの取りまとめ役を行うことになりました。私のグループは、韓国、中国、インド、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランドと私を含めた日本人2人の計8人で構成され、開催の数週間前からグループ活動に関わる予備討論をe-mailで重ねてきました。

ミーティング初日、自分の研究紹介用のポスターを手に会場を一路目指しました。しかし、その日は関東地方に強風が吹き荒れた日で、結局集合時間の30分遅れでつくば駅に到着し、初日にして出鼻をくじかれる格好となりました。ガイダンス終了後、しばらくしてから7人のグループメンバーと初顔合わせを行いました。メンバーにおいては、英語を母国語としている人が多く、当初から英語での会話についていくのに必死でしたが、私としては直接英語に触れるいい機会でした。この時から、この多国籍なメンバーと最終日まで共に行動することになります。

2日目～4日目にかけて、ノーベル賞受賞者、ノーベル賞

委員、日本の著名な研究者、さらに文化人として画家の平山郁夫先生をお迎えし、朝から夕方まで先生方の研究や研究に対するお考え等について講義を受けました。お招きしたノーベル賞受賞者は、ノーベル物理学賞を受賞された江崎玲於奈先生、H. ローラー先生、ロバート B. ラフリン先生、同化学賞を受賞された A. ヒーガー先生、そして白川英樹先生の5人の先生方でした。普段メディアでしかお目に掛かれない方々ばかりで、当初は不思議な感覚でした。しかし、懇親会や昼食時に直接お話する機会があり、実際はとても気さくで紳士的な方々ばかりでした。講義においても、ヒーガー先生は、印刷による薄い太陽電池の実物を見せながらの講義を分かり易く行われ、「世の中に出すには安くないといけない」ことも強く仰られていたことが印象的でした。また、私の専門分野に近く、最も興味深かったのが飯島澄男先生の講義です。TEM内で2本のカーボンナノチューブ(CNT)に電流を流して溶接し、1本の長いCNTを作製する様子等を動画でご紹介頂き、生物や薬学などの異分野のグループメンバーもその動画に興味津々で、口々に面白いと言っていました。日頃からTEMを扱っている私にとっても、ナノスケールの現象を直接目で観察出来る電子顕微鏡は、多くの研究者を魅了する強力なツールであることを改めて実感しました。

3日目の夜、あらかじめグループ内で決めておいた「研究者が社会に求められている役割は何か？」について、メンバーと最終的なまとめの議論を行いました。現代社会は、文明が高度に発達した社会ですが、数百年前と比べても人の体や心が大きく進化したわけではなく、周りに存在する「もの」の変化に合わせて法律・経済などが時代の流れとともに急激に変わってきています。つまり、科学や技術の進歩は現代の文化を作り出す基盤であり、今後もその根幹を支える研究者は人類の新しい世界を創り出し、支えていく役目を負っていて、我々若手もそのことを意識して努力しなければならないことを再認識しました。また、国際的に研究競争が激しい状況の中、お互いの立場を理解し、良い意味で刺激しあい、分野や国の境界も越えた協力体制の構築により、これまで出来なかったものが産み出される可能性もあります。そのためには、今回のミーティングは、今後の研究を担う可能性のあるアジア・オセアニア圏の学生がそれぞれの立場を理解し、親交を深めることが出来た、良い機会であったと思います。私にとって、本ミーティングは始まりであり、今後もこの貴重な体験や繋がりを活かし、研究に精励していく所存です。今回このような機会を設けて頂いた日本学術振興会を始めとする関係機関の皆様にもこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

3. おわりに

これからも今回得たような人とのご縁を大切に、お互い協力し刺激しあえるような人との関係を構築していきたいと思っています。今後、少しでも材料科学に貢献できるような研究者になることを目指して、新たなことに挑戦し、日々努力していく所存であります。最後に、これまで東北大学でお世話になりました諸先生方、先輩方に深く御礼申し上げます。また、心身ともに支えてくれた両親、友人に感謝いたします。今後とも皆様の変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

(2008年10月1日受理)

(連絡先: 〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1)